
召喚獣が還るまで 2

ヘル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚獣が還るまで2

【Nコード】

N6970L

【作者名】

ヘル

【あらすじ】

前作、召喚獣が還るまで、で召喚されたままかえれなくなったヤクザ安藤と召喚士プリムローズはレベルアップのために南の魔人を倒しにいくが……ヤクザと少女にどんな接点があるのか……今度はロマンスだ！！

（前書き）

甘いのが苦手な方注意です。あと強引な文章は目をつぶっていただければと思います。前作を読んでいただいたほうがたのしいかと思えます。

ゴビゴビ砂漠・

「おい、暑いな……」

砂漠のど真ん中を20台半ばくらいの長身の男が歩いている。男の服装は黒いスーツにワイシャツであり、24金のネックレスと口レスを装備していた。遮蔽物は皆無、スーツは熱を蓄え、ネックレスと口レスは常人なら火傷間違いなしの温度だが、ステータス異常に強いという特性を持つこの男にはせいぜい日差しの強い夏の日程度の感覚だった。

男はさつきから自分の影に隠れている淡いピンク色の髪の少女をチラと見る。

少女の格好はこの暑さの中にも関わらず、マントにローブ、ブーツという冬服にしか見えないものだったが、汗一つかいていない。

「お前暑くねえの？」

歩く以外にやることの無い男は少女に尋ねてみた。

「うん、マントの中に氷精ヒヤロンを召喚しておいたから涼しいよ？安藤もいる？」

そう言つてマントから氷精ヒヤロンなる珍妙な物体（安藤には半透明の虫歯君みたいにみえた）を見せた少女に対して爽やかな笑みを浮かべると問答無用でヒヤロンに、デコピンを食らわした。

ズビシッ！！

そんな音を立てたデコピンで、少女のマントにヒヤロンをリリースした安藤は言い切った。

「おいクソガキ、覚えておけ。俺はなあ、虫歯が大っ嫌いなんだよ！こんなもんくつつけたら全部虫歯になっちまうだろ！！」

「クソガキじゃないってば！！いい加減ちゃんとプリムローズって名前覚えて！！それとヒヤロンは虫歯じゃないよ……」

まだびくびくしてるヒヤロンをなでながらプリムローズが抗議す

るが安藤はまともに取り合わない。

「うるせえっ！！、テメエみたいな胸も尻も出てないクソガキのどこがプリプリだ……名前詐欺じゃねえか。……あゝキャバクラ行きてえな」

ほとんどセクハラまがいの発言に対してプリムローズは名前そのままに顔を真っ赤にして半泣きで怒る。

「人が気にしていることを……安藤のバカ！！」

しかしこのやり取りにも飽きたのか安藤は遠くに目を凝らしていた。

「お、次の町が見えるな。さっさと行こうぜ」

それだけいうと安藤は大股でズカズカ歩いていつてしまう。置いてかれまいとプリムローズは小走りにならざるを得なかった。

「あ、ちよつと足早いってば、置いてかないでよお」

二人の歩いているゴビゴビ砂漠はオアシスが数キロ置きに点在する、歩いて渡れる砂漠のため、地理的には軽装で歩いていても全然問題が無い。ただし砂漠地帯につき物の凶悪なモンスターもたくさんいるため、二人の他に歩いている人影は見当たらない。今度の二人の目的は砂漠に現れる砂嵐の魔物を退治することだった。

- 2ヶ月前のある王国 -

北を支配していた強力な魔族キャンサーとの戦いに勝利した勇者パーティは、王様から褒美を貰っていた。

「勇者とその仲間よ、此度の戦いまことに大儀であった。褒美を取らそう」

そう言う王様はみな願いを順に聞いていった。

戦士タイソンは王国の騎士団を一つ貰った。何でも騎士団長になるのが夢だったらしい。

賢者ビルは東の島に研究に行くために船団を一つ貰った。大陸の東にはハラキリというスキルを持つチョンマゲを装備したサムライ

という戦士が住んでいるらしい。その研究をしに行くには一人では難しいそうで、そのための研究チームを預かっていった。

勇者はお姫様との交際を王様に認めてもらっていた。正義とか善とかそういうオーラバリバリなキャラだと思ったが案外俗なところもあるんだなーと安藤が意外そうな顔をしていた。

プリムローズは城に保管されていた上級召喚魔法2つの触媒と、禁術の解禁を許された。お金や領地などにはあまり興味が無かったのと今後を考えると自分の召喚士としての力を上げるべきだと考えたためだった。

そして安藤は……。

「金、女、あと土地寄越せ」

……その場の全員が沈黙した。

「この人召喚されたばかりで常識とか無いんです！すみません！！」慌ててプリムローズがフオローするが王様は笑顔のまま硬直していた。

ここまで露骨な欲望を口にする人間に遭遇したことが無かった王様は汗をかきつつも何と喋っていいかわからなかった。沈黙に耐えかねたビルが提案をした。

「安藤は元の世界に帰りたいのだからプリムローズのレベル上げに付き合っただろう？」

「ん、まあそうならざるを得ないわな。何か宛があるのか？」

「ならば簡単だ、南の砂漠を超えた魔王国には今、砂嵐の魔人が出現しているし、西の帝国には魔人の住む遺跡がいくつもある。自由旅行許可証の発行をお願いするのがいいだろう。」

この王国の存在するウーラシア大陸には王様の統治する王国の他、魔王の統治する魔王国、皇帝の統治する帝国などの他、法王や大統領など様々な元首が統治する国がある。大昔は戦争やら民族紛争で国を争わせていたが、今は共通の敵として魔物や魔族がいるため、広すぎる大陸を分割統治するために複数に分かれているのだった。安藤のいた世界のような国名といった概念は無く、王様が治めてれ

ば王国、皇帝が治めてれば帝国といった感じに呼ばれている。また人類の絶対数が安藤の世界に比べて少なく、魔術、召喚魔法といった物理法則では図れないような特殊な要素から物資の奪い合いなどはほとんど無縁とされている。しかし反面、絶えず魔族の脅威に脅かされているため、個人の旅行などは原則禁止とされている。実は民族単位での移民などは引越し感覚でしょっちゅう行われているほどにフランクな世界だが、魔物と戦うことを生業とする者がいないとその暢気な生活もできないため、傭兵団などには移動先での便宜をはかつてもらえる自由旅行許可証なるものが各国の元首から発行されているのだった。

「ふむ、普通は傭兵団とかに配るものじゃが、此度の働きを考えれば個人に渡しても誰も文句は言うまい。用意しておくのでしばし待つがよい」

王様はそう言うつと謁見を終わらせたのだった。

- 勇者パーティー解散の酒場 -

「僕は来月からサムライを探しに乗船するつもりだが、プリムローズは結局どこまで行くつもりなんだい？」

いくつかのようにイモのフライをもりもり食べながらビルが訪ねる。「安藤と話して決めたんですけど、明日には自由旅行許可証がもらえるそうなので、南の魔王王国をめざしてみようかなって考えてます」プリムローズは自身の名前と同じ、スモモの果実酒を飲みながら安藤に芽を向ける。

この世界の人間は安藤の世界の白色人種の5倍ほどアルコールに強いいため、若干16歳のプリムローズですらリキュール並みのアルコールくらいならばジューズ感覚で飲めるのだが……安藤はタイソンに勧められたエールを一杯飲んで酔いつぶれていた。ステータス異常に強い特性も、酔いはステータス異常とみなさなかったらしい。「ぐごー、ぐごごー……アンディ、今日はステータス……叔父貴、

死ぬなあ」

この場にいるメンバーは知る由も無いが、元の世界に絶賛置き去り中の火竜アンディと飯を食っている夢と、世話になった叔父貴の襲撃された抗争の夢が混ざったものをみていたらしい。にやけたり泣いたり忙しい男である。メンチ切りをするとひたすら怖い顔の安藤だが、顔の作り自体は端整であり、左頬にある十字の刀傷さえなければ美青年と言って差し付かえないだろう。プリムローズは安藤が一瞬見せた悲しそうな顔を見て、胸に切ないものを感じたがメンチ切りの表情になったのを見て、きっと果実酒のせいだろうと思うことにした。

「しかし、結成してまだ一週間も経っていないのに解散とはなんだか寂しくなるな……」

いつもは明るい勇者が少し残念そうな表情で呟いた。だがタイソンは大人らしい表情でそれを否定した。

「いいじゃないか、結局目的は達成できたし、みんなの次にやることも決まってるんだ。それに勇者だってこれから毎日姫様のご機嫌取りでいそがしくなるさ」

そいつは違いないとみんなで勇者を冷やかして夜は更けていった。

翌日の早朝、プリムローズと安藤は王国を後にしたのだった

- 夜のゴビゴビ砂漠 -

結局、昼に見た町は蜃気楼だった。無駄にダッシュで追いつこうとしたその結果、無人のオアシスにたどり着いたところで夜が近くなったため野営することになった。

「しかし、魔王国ってのはまだ着かねえのかよ」

この2ヶ月の旅の間にプリムローズから、この世界の文字を習った安藤は焚き火の前で地図と睨めっこをしていた。プリムローズの教え方がうまいのも良かったが、安藤自身の筋もよかったため、す

で一般人並には読み書きができるようになっていた。安藤の行動はバカなことが多いが頭は悪くないのだ。

「安藤は水浴びしなくていいの？」

そう言つて安藤の顔の隣、約15cmの距離にプリムローズがひよっこり顔を出した。先ほどまで水浴びをしていたせいか、まだ乾かない薄桃色の髪からは甘い匂いが香る。普段安藤にクソガキよばわりされているが、プリムローズは深窓の令嬢もかくやというほどに美しい。すっきりした目鼻立ち、大きな瞳、長い睫、その名のように薄紅色をした唇と、彼女が町を歩けば振り返らない男はまずいない。そんな魅力的な少女が息のかかる程近くにいるこのシチュエーションには、さすがの安藤も一瞬どきつとしたが普段クソガキ呼ばわりしている相手にどきつとした自分にムカつき

「チツ、頭濡れてると風邪ひくぞ」

と、タオルを手に取りプリムローズの頭をガシガシ拭いたのだった。「って、ちよつと痛い、痛いってば!!」

プリムローズがタオルの中で抗議する中、安藤は

「……後3年は食えねえな」と苦笑したのだった。

- 翌朝 -

早朝、テントからはみ出て寝ていた安藤が、パビルサグという猛毒を持つサソリ人間に刺されたため二人は朝から戦闘三昧だった。

どうやら無人才アシスだった理由はパビルサグの集落になっていたからだと気づいたときには周りを囲まれていた。ステータス異常に強い安藤は、猛毒こそ効かなかったが結構痛かったらしく、結局全滅させるまで暴れ続けた。しかし最後のパビルサグが呼び寄せた全長30mにもなるうかという巨大芋虫デューンウォームは砂の中から攻撃してくるため即死攻撃しかない安藤でも苦戦することになった。

安藤が暴れる音で目を覚ましたプリムローズはパビルサグがいるうちは寝惚けていたが、さすがに状況を察して召喚魔法を繰り出し

た。

「^{ドリルモグラ}土竜召喚！！えーつと貴方の名前は……ドリルモグ！あの虫やつちやって下さい」

ドリルモグラは全長15m級のグランドドラゴンを召喚する上級召喚魔法である。触媒にはドリルにしか見えないグランドドラゴンの牙が必要となるが、これは王様から貰った褒美の一つだった。

出現したドリルモグはグランドドラゴンにしてはかなり大型の20m前後の巨躯を誇り、全身薄黄色の結晶のような鱗に覆われたドラゴンだった。ただし口の中には無数のドリル状回転牙と、鼻や額に凶悪な角が生えているため、どうみてもモグラには見えない。

「ドリルモグじゃねえだろ！？」

子供の頃にアニメでみたドリルモグを覚えていた安藤が、思わず突っ込んでしまうほどに凶悪な面構えだった。

「え、でも自分でドリルモグって言ってたよ？」

そんなプリムローズと安藤のやりとりを無視して獣共の争いは熾烈なものとなっていた。

巨大芋虫の横っ腹にドリルモグの角が突き刺さり紫色の体液が飛び散る。巨大芋虫も負けじと3列になった歯列でドリルモグの背中に噛み付く。砂煙と血しぶきを飛び散らせながら戦う2匹から少し離れたところで二人は未だにアニメのドリルモグについての話をしていた。

「おっ、終わったみてえだぞ？」

結局戦いはドリルモグが巨大芋虫を解体して勝利した。

- 数日後 -

「ねえ、安藤く疲れたよ、休もうよ」

そんな気の抜けた声を出しながらプリムローズはぺたんと膝から座り込んだ。

たいした距離は歩いていなかったが、連日の戦闘で召喚獣を呼び出しMPを大量に消費したため、集中力が散漫になっていた。ズカズカと大腿で歩いていく安藤との距離がかなり離れていることに気が

つかなかった。

「ったくしょうがねえな……って結構距離あいたな……うお!？」

安藤が振り返るとプリムローズのすぐ後ろに砂色の布で全身を覆った40名ばかりの一団が現れていた。

「おい、こっちに走れ!!」

安藤がプリムローズに呼びかけるが、彼女がそれを理解するより早く、その謎の一団に担ぎ上げられてしまった。そしてその全員が人間とは思えないほどの速さで逃げ去った。

「きゃああああああつ!？」

プリムローズは何が何だかわからないまま叫び声を上げている。

「待てや、ゴルアツ!!!!!!」

自分の目の前から逃げ去る人攫いの一団を安藤は走って追いかける。普通ならば追いつけないところだが、安藤の素早さは999もある。素早さは大体、人間で255がMAXになるパラメータだが、単純に走力と言えば安藤ならば時速150キロ程度は出るのだ。

謎の一団も砂漠を50キロ以上で走っていたから十二分に早いのだが安藤は最後尾から順番に殴り倒していく。

「その女は俺のもんだ!返せ、クソがつ!!」

片っ端からぶん殴り続け、ついにプリムローズを抱える一人を追いつめたその時、その男の装束が解けるように姿を変え、真の姿を現した。

「貴様、ヨクモ私ノ部下ヲ全滅サセテクレタナ……人間ニシテハヤルヨウダガ、コノ『すからべす』ガ真ノ姿ヲ見セタカラニハ死ンデ貰ウゾ。ソシテ砂嵐ノ魔人シムーン様ノ生贄ニ、コノ娘ハイタダイテイクゾ」

スカラベスと名乗った男の全身に巻かれていた布は羽や足となり、全てが展開されると2mほどの昆虫人間となっていた。

「行クゾ!!」

ヴヴヴヴヴッと言う不吉な羽音を立てて加速したスカラベスはそのまま安藤の胸めがけてタツクルを食らわせた。その速度に一瞬

反応の遅れた安藤はまともに直撃を貰ってしまい跳ね飛ばされた。安藤が地面に落ちる前にスカラベスが元いた場所に舞い戻る。

頭から地面に落ちた安藤はすぐさま起き上がると

「ぐうお！？痛つてえな！！この糞ころがし野郎が！！」

と怒りのこもった眼差しでスカラベスに殺気を放つ。

「何ダト、マダ生キテルノカ！？」

スカラベスの一撃はデューンウォームを一撃で吹き飛ばすほどの威力を秘めていた。その直撃を受けて人間が無事なはずはないのだが…安藤のHPは55000もある上に体力も999と、この世界で一番巨大なエンシェントドラゴンに匹敵するステータスを誇ることは気づかなかった。

「召喚獣：氷精ヒヤロン 攻撃スキル『アイスニードル』実行！！」戸惑うスカラベスの不意を付いて、抱えられていたプリムローズが氷精ヒヤロンをスカラベスの関節に放り込んだ。

「冷タイ、痛い……ソシテ動ケナイゾ！？」

ヒヤロンのアイスニードルはスカラベスの全身の関節を凍結させていた。スカラベスが膝をつき右の2番目の腕が根元から砕け散ると、抱えられていたプリムローズは素早く身をひねって着地する。

そして入れ違いに懐に入り込んだ安藤が最恐の表情でスカラベスにメンチを切る！！

般若も裸足で逃げ出すスーパーメンチ切りを真っ向から受け止めてスカラベスの複眼が光を失った。

「……貴様八人間ジャナイノカ？」

「俺は極道だ……お前はクソでも転がしてろや！！」ズガン！！

スカラベスは安藤のメンチ切りからゼロ距離ヘッドバットで地面に埋まったのだった。

「おい、大丈夫か？」

安藤は額からぷすぷすと煙を出しながらプリムローズの無事を確かめる。

「……」

その場に倒れたプリムローズの顔は真っ青になっていた。

「おいクソガキ、冗談で死んだふりしてるんじゃないぞ……目え開けるプリムローズ!!」

安藤の目は全てのステータスを見ることが出来る。

名称：プリムローズ

種族：人間（召喚士）

ステータス

LV99

HP200/3500

MP20/5000

攻撃力32：魔力280：速さ180：体力：50 知能245：運50

戦闘コマンド

『召喚』（契約している召喚獣を呼び出します。）

『召喚2』（触媒から契約していない召喚獣を直接呼び出します。）

『上位召喚』（複雑な儀式と触媒を使い、契約している召喚獣を2ランク上の能力で呼び出します。）

『アイテムモバイル』（アイテムを収納する空間を自由に使用できます。）

状態異常：衰弱（体力が表示の10分の1程度になります。）

魔力枯渇（MPが減りすぎると稀に昏睡します。至急休む必要があります）

瀕死（HPが10分の1以下になると勝手に死ぬかもしれませんね（笑））

「勝手に死ぬかもしれませんがね（笑）ってふざけんじゃないぞええええええええええええええええ!!」

どういう根拠で書かれてるのかわからないステータスの注釈にとんでもないことが書いてあったことを読み取った安藤は絶叫しながら

らステータスウィンドウを遠くにぶん投げた。

「あー、もし、その人？」

「ああ!？」

頭の中がパニックになっていた安藤は声をかけられるまで、目の前に旅人風の髭を生やしたハゲ親父がいることに気が付かなかった。

「そっちの人は病気が何かかね？」

「見りやわかるだろ、瀕死だ瀕死!! オッサン医者か？」

安藤の失礼な物言いにも関わらずハゲ親父は懷から瓶を取り出して安藤に見せた。

「医者ではないが、エリクサーを持っているんだ。見たところ虫人を倒したのはあんた達みたいだが、ワシの願いを聞いてくれたらこれをあげてもいい」

「よし寄越せ」

安藤は内容も効かずにエリクサーをひつたくとプリムローズに飲ませた。横でハゲ親父が何か言ってるが安藤は聞かない。しばらくするとプリムローズは目を覚ました。

「すつごく……口の中が苦い……」

顔色は元に戻っていたが表情はさっきよりもつらそうになっていた。

「まあ、死人も目覚めるくらい苦い薬だしね。で、お連れさんも復活したみたいだしワシの話を聞いてくれ……ないのか……まあいい、とりあえずこんなとこは何だし10キロも歩かないうちに魔王国に入れるから町に付いたら休憩しながら話をさせてほしいんだが……」
目的の地が近いこともあり、二人はハゲ親父についていくことにしたのだった。

- 魔王国 -

事前に聞いていた勇者の推奨していた宿屋を町に入って30分も経たないうちに発見した二人とハゲ親父はさっそくチェックインし

た。

「さて、ようやくまともに話ができるな。こんなに話を聞かない男は久しぶりだ……。自己紹介させてもらうが、ワシの名前はゴーパー、一応この国の戦士長をやらせてもらっている」

ハゲ親父改めゴーパーは王国にいたタイソンより少し年上だが、体格は彼に勝るとも劣らなかった。

「エリクサーなんて高価なものを持っているからどんな人かと思ったら、戦士長さんだったんですね。先ほどは助けていただいたいてありがとうございます」

「あゝ、なんだ、オッサンが通らなかつたら本当にやばそうだったからな、俺からも礼を言うぜ」

プリムローズが丁寧に感謝の言葉を表すと安藤もようやく礼を述べた。

「ところで、私達にお願いがあるのですがどんなことなんですか？あんまりお金とかはもっていないんですけど……」

不安そうなプリムローズにゴーパーはいきなり土下座をして話始めた。

「虫人を倒したあんた方の力を見込んで頼みたい。どうか魔王様を殺す協力をしてもらえないだろうか……」

ゴーパーの話を聞いて安藤は鉄砲玉の依頼か？といぶかしんだが、あまり気にはしなかった。むしろ態度を変えたのはプリムローズだった。

「まさか魔王様を暗殺するつもりですか！？」

この世界における王族はその義務のためにみな高レベルを有しているためほとんど暗殺などは不可能に近い。二人が出発してきた王国の王様も温厚そうな老人だったが、さりげなく若い頃には先代勇者と一緒に冒険をしたレベル95の剣術の達人だったりする。

よほどのことが無い限り、王族の命を狙うなどということは自殺行為である。

「うむ……わが王は砂嵐の魔人シムーンに肉体を奪われたのだ」

「なるほど、よし殺ろう」

安藤は即決した。スカラベスの言っていたシムーンは安藤のぶっ殺すリストの上位に名前が入っていたのだ。まして元から砂嵐の魔人でレベル上げ計画を立てていた以上ためらう余地が無かった。

「あれは2ヶ月前のことだ、シムーンが砂漠に砂嵐を起こすことに飽きたからといって魔王城に突如現れて我々城の戦士を全員外に放り出したのだ。我々が再び王の間に戻ると、魔王様はシムーンに取って代わられていた……我々の力ではかなわずに結局おめおめと逃げ帰ることになったのだ」

「よし、城に行けばいいんだな？ ゆっくり休んだらシムーンだか魔王だかわからんアホをどつきまわしにいくぞ。寝るわ」

そのまま安藤は二人を置いて爆睡を始めたのだった。

- 真夜中 -

「ねえ安藤、起きてる？」

青い月明かりが入る部屋でプリムローズは声をかけた。明日のことを考えたら眠れなくなったのだ。

「ああ…何だ？」

「色々あった2ヶ月だったけど明日シムーンを倒したらこの旅も終わっちゃうんだよね……」

安藤は天井を見ながらその声に応える。

「ああ、変な生き物にやたら絡まれて暴れたり旨い物食ったりそれなりに楽しかったな……お前が攫われて死に掛けたのは笑えなかったけどな……あの（笑）って何なんだよな」

「（笑）？何それ？……変なの」

「そついうのが出たんだよ」

「ふーん、それはわかんないけど……安藤、今までゴメンね。私のミスで迷惑かけちゃったから」

「へっ、よせよせ今更侘びなんざいらねえよ。お前は俺の舎弟共に比べれば全然マシだ」

安藤はどうしようもないサブとかヤスとか自分の舎弟の顔を思い

出した。悪い奴らではないがクズといえばクズみたいな奴らだ。顔を横に向けるとプリムローズと目が合った。

少しの間見詰め合っていたがどちらとも無く視線は再び天井を向いた。

「お別れするの寂しいな……」

プリムローズの小さな一言に安藤の返事はないまま夜は更けていった。

余談だがゴーバーは隣の部屋でガーガー騒をかいていた。

- 砂嵐の中の魔王城 -

「ん？また来たのかゴーバー」

魔王を乗っ取ったシムーンが玉座の上で足を組みかえる。

「魔王様を解放しろ！！さもなくば今日こそお前は死ぬぞ」

ゴーバーの鎧は城に巢食う魔物との戦闘でぼろぼろになっていた。「お前も懲りない男だなあ、今日こそ死ぬのはお前のほうじゃないのか？」

大昔に魔族と分岐して人間と混血の進んだ魔王は耳がとがったり、角が生えていたり、青い肌こそ人間と違ったが、他の外見的特長はほぼ人間と同じだった。しかしシムーンが取り付いたことで桁違いに魔力が上がっていた。

「そもそもなぜ魔王様に取り付いたのだ、お前ほどの魔人ならばそのままでもよかったのではないか？」

「知れたこと、調子に乗って本体をさらけ出したキャンサーが勇者に討たれたことは知っておろう？私は慎重派なんですね。この地で最も強い敵となりうる魔王を吸収することで敵をなくし、人質としてのだよ！」

魔王シムーンはそう言うのと熱風の魔法でゴーバーを打ち据えた。城を取り巻く黒い風と同じ熱風がゴーバーの体から水分を奪い、体力を削っていく。

「ぐあああああ……」

ゴーバーが倒れたのを確認し、握っていたメイスを蹴り飛ばすとゴ

ーバーの頭を踏みつける。

「お二方、今ですぞ!!」

ゴーバーは踏みつけられながら魔王シミーンの片足にしがみつくと、足をへし折る。

「く、小ざかしい、真似を!!」

魔王シミーンが足を修復し、ゴーバーを蹴り飛ばすと同時に

「禁断召喚獣：死神ウラン 攻撃スキル『アトミックボム』発動!!」

「召喚獣：安藤 攻撃スキル『チャカ』発動!!」

プリムローズの多重召喚攻撃スキル発動が重ねられる。

禁断召喚獣とは国家規模で封印されているクラスの危険な召喚獣であり、死神ウランは呼んで字のごとく放射線を出すあのウランが神格化したものだ。アトミックボムはドラゴンですら即死させかねない必殺の魔法であり、安藤のチャカも以前の火竜どころではないすさまじいものになっていた。懐から取り出したチャカは全長50センチを超える超大型拳銃となっていた。引き金を引いた瞬間光の竜が炸裂する。

魔王シミーンは猛毒の風で二つの召喚術を弾いた……つもりであったが、二つの術は全てを貫通する放射線属性と、風などでは防げない光属性の攻撃だった。次の瞬間には魔王シミーンの体を直撃していた。

「ばかな!？魔力の風を抜けただど!？魔王も死ぬぞ!？」

魔王シミーンの体に風穴が空き、残る体も崩壊していく。

「魔王様、お別れです……」

ゴーバーが涙を流しながら魔王シミーンの崩壊を見届ける。

「これで良かったんでしょうか？」

プリムローズは泣いているゴーバーに声をかける。

「はい、ありがとうございました。今の魔王様はお亡くなりになりましたが、近いうちにまた生まれ変わりになるはずですよ」

それまでは自分達が魔王国を守り城も元通りにしてみせますとい

うゴバーを置いて二人は空気を読んでその場を後にした。

直後にテレレッターというおなじみのレベルアップ音がゴバーから連続でなったのは言うまでもない。

そして

テレレッター

プリムローズはレベル100を迎えたが、今度こそ安藤はレベルアップしなかった。

その日の晩はゴバー達、魔王国の戦士がささやかながら魔人討伐の宴を開いてくれたため、安藤とプリムローズはご馳走を食べ平和な時間を満喫していた。

やがて宴が終わり、二人の別れの時が来た。

「あー、そのなんだ。うまく言えねえけどよ、達者でな」

「うん」

「泣くんじゃねえよ、だからクソガキなんだよ」

「……クソガキじゃありません、プリムローズです」

「……いい女になれよ、そしたらプリムローズって名前で呼んでやるから」

「……うん」

「今生の別れじゃねえんだ、本当にピンチの時にでもまた来てやるよ」

「うん、ありがと……また会えるよね？」

そう言ってプリムローズは安藤にキスをすると送還術を起動した。

安藤が最後に見た表情は最高の笑顔だった。

- 3年後 -

「安藤、死ねやあああ!!」

「お前が死ねよ」

ドスを持つてつつこんできたスキンヘッドのヤクザにヤクザキッ

クを一発。プリムローズの攻撃スキルではないので即座に死にはしないが慣れでしっかり内臓を破裂させる。

元の世界に戻った安藤はまた抗争をしていた。今度は某山。組との抗争だ。元から安藤の組とは仲が良くなかったがシノギの問題でサブとヤスがリンチにあったことで安藤が事務所を一つ潰したため本格的な抗争となったのだった。

「富士雄、無事か!？」

「健さん、俺あ大丈夫でさあ。それよりもさっさと敵をバラしちま
いやしよっぜ」

系列組の高蔵タカクラ 健タケルは昔から安藤のことを目にかけてくれていた安藤
にとつての兄貴分だった。それは今でも変わらない……はずだった。

「健さん……そいつは何の真似ですかい？」

安藤にとつての兄貴分は安藤に拳銃を向けていた。

「富士雄……俺はお前のことを気に入ってたんだぜ……それは今でもだ。けどよ、お前はケンカを売ってはいけねえもんじゃ売っちゃまったんだ」

「……会長は俺の命で手打ちにしようって考えてるんですかねえ」
健の目が鋭くなる。

「ああ、お前の命で、他の組員の命を買おうとしてるんだ。悪いが死んでもらわなきゃならん。……許せよ」

「もう一回くらいあいつに会いたかったな」

健の持っていたトカレフが火を噴いた。

- 3年後の王国 -

3年が立ち、プリムローズは大きく成長していた。安藤と別れた後再び勇者とビルと合流することになった彼女は絶体絶命のピンチを迎えていた。

西の帝国を滅ぼした超魔人ダイオキシンの最終決戦で味方のほとんどが倒れていた。

騎士団長タイソンは気絶中、大賢者ビルも猛毒の瘴気を防ぐため

に結界を維持するので精一杯。強化召喚をした火竜アンディも決定的なダメージを与えられない。

「く、ここまでか……安藤がいてくれたら……」

今までダイオキシンの切り結んでいた勇者の神剣がついに折れてしまった。その瞬間絶望がパーティに訪れる。

プリムローズは何度か安藤を召喚できる魔方陣を研究していたが、元々事故で呼び出せただけの安藤を正式に呼び出す方法はついにみつからなかった。プリムローズは残りのありつただけのMPで召喚陣を描く。

「お願い、来て……」

果たして現れたのは濛々たる黒煙だった。

・安藤の世界・

「あー、会長ですか？ええ、はい、始末つけましたんで。帰りますわ。後よろしくお願いします」

安藤を撃った健は会長に報告して電話を切る。床には大量の血液がぶちまけられていた。健が念入りに弾丸をぶち込んだ死体に頭は無かった。

「しんどいわ……あんなの無しだろう」

そう言うとな健は現場を後にしたのだった。

・エピソード・

超魔人ダイオキシンの豪腕がプリムローズに直撃した。

誰もが死んだと思った。

しかし腕は明後日の方向に吹っ飛んでいた。

黒煙から現れた男のスーパーメンチ切りに超魔人が後ずさる。

「あれやるぞ……」

「召喚獣：安藤 攻撃スキル『チャカ』じゃない……もっと強力になつて……」『マシンガン』実行」

「俺の女に手え出してるんじゃないぞ……」

数千発の光の竜が超魔人を芥子粒一つ残さず消滅させた。

テータレッター

みんなのレベルが上がっていく。そして安藤のステータスは再びプリムローズよりも上がってしまったのだった。

「また、帰れなくしちゃった……」

「また旅に出ればいいさ」

二人は再会のキスをした。

その後 -

結局、安藤が戻ってきて再び勇者パーティは解散した。運命が引き合わせた二人はそのまま旅に出た。その後も色々な冒険があったけれどもそれは二人だけの思い出。めでたしめでたし。

（後書き）

読破お疲れ様でした。大幅に文章の増えた2はいかがでしたでしょうか？多少のラブロマンスも盛り込んでみたので笑いをメインに考えてきたごめんなさい。3を書くことがあればそうとう珍奇生物オンパレードでいきたいですね。読んでいただいてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970/>

召喚獣が還るまで 2

2010年10月8日14時50分発行